

月島短編SS

うなむ～

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校でもバレーを続ける辺り、欠片程のバレー熱が中学生時代にも芽生えていたり
したのでは?という思い付きの産物。

↓注意↓

初作品初投稿です。

思い付いた文章の肉付けをAIノベリストで補填しており、9割程が自筆になります
が、原作の台詞からの引用も多めです。

文量も少ないし駄文だけどせっかく書いたし…位の気持ちで投稿してますので、御目

汚しはご容赦くださいませ。

月島短編
S S

目

次

1

月島短編 S S

かつての熱は失つたものの、今こうして中学でも部活として選んだという事は僕の中でそれなりに好きな物ではあつたのだろう。

その程度の、スポーツの中では好き、程度の存在であつたバレーが少しだけ特別な物になつたのは、中学最後の試合。

地区予選3試合目、相手はどうやらハーフらしく、中学生離れした体格のエースを軸にしたワンマンチーム。3枚ブロックをものともせず上から打ち抜いてくる、味方からしたら頼もしく、相対している身からしたら絶望としか言い様のないような存在。

僕自身は上を抜かれることはなかつたものの、幾度となくブロックを弾き飛ばされた。そんな相手を主軸とした攻撃は止まらず、1セット目を取られ2セット目もじりじりと点差を離されてしまつてゐる。今は監督がタイムを取りつかの間の休息を取つているが、チームの顔色は暗い。

（もう無理かな……まあ、あんな“エース”相手によく戦つたほうデショ）
たかが部活。今から努力でなんとかなるなんてことはないし、なんでもがむしゃらに

やればいいってもんじゃない。監督やコーチなんかは大会が始まる前に全ての試合に勝つて全国に行くのだと口では言つてはいたが、どれだけ頑張つていようと上に行けば行くほどいざれ限界は訪れるのだと僕は中学生ながらに理解していた。

力が及ばずに負けを認めるのは気に食わないが、僕たちの限界は今この試合だつたというだけの話なのだろう。

もう負けるのか、このまま終わるのか。チーム全体としても諦めムードの中、チームメイトがボソッと呟いた。

「一番長身の月島でも止められないなら、もう無理じやんか…」

そんな諦めきつた呟きは、僕の幼馴染の山口にも聞こえていたらしい。

「ツッキーが負けっぱなし訳ないだろ！」

「でも、実際止められてないじやんか…」

「……っ！」

何でかは分からぬが僕の事を慕つてくれているらしい山口はすかさず反論したけれど、反論に反論で返され、何か言おうとするも言葉が出ず悔しそうに、下を向いてしまつた。

そんな姿を見たから、という訳ではないが、反応する気もなかつたのに気づけば僕も口を挟んでいた。

「いいよ山口、僕が止められてないのも事実だし」

「でもツツキー！：「けど」！」

「自分で言うのはともかく他人に無理って言われると腹立つよね。」

別に山口のフォローをするつもりではないし、口に出した事が本心だ。負けるのはしようがない。僕が相手のエースを止めていかないのも事実だ。それでも、自分が諦めるだけならまだしも、他人に無理だと言われるのは腹が立つ。

——一本だけでもいい。完璧に止めてやろう——

今思えば、バレーに熱を失つて以来、本当に久しぶりに目の前のボールの事だけを考えていたかもしだれない。

タイムが終わり、ピーネーツ！！というホイッスルとともに試合が再開される。

相手のサーブをリベロが拾い、

セツターへとトスが上がる。繋いだ攻撃はプロツクを避けたが、あいにくリベロの正面に行つてしまい綺麗に上げられてしまった。

——またあのスペイクが来る——

チームに緊張が走る中、僕の頭の中は今日で一番考えが巡っていた。

助走距離・セッターのトス・スパイカーの目線・今までのスパイクの傾向

止められなかつたとはいえ、ただただブロツクを弾かれていたわけじやない。試合を始めた時と比べたら格段に情報は増えている。

何より、人間とは慣れる生き物だ。大きく弾き飛ばされていた試合序盤と比べ、辛うじて繋げるくらいには壁として機能してきている。

頭の中で冷静に分析をしながら、コート上の全てを把握する。

綺麗なAトス。十分な助走距離。今日の試合で幾度となくこちらの3枚ブロツクを打ち抜いてきた攻撃パターン。今日一日試合を通して決め切ってきた自負があるので、自身に満ちた表情。

——ああ、このスパイクを完璧に止めたら気持ちがいいだろうな
『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』——

そんな余計な事を考えているのにも関わらず、いつも以上に頭は冴え渡り相手の挙動が良く見えていた。

スパイクが決まると確信しているスパイカーの表情

力強く振り下ろされるスパイク

しかし、止めるには十分なほどに“知つて”いるのだ

相手の視線、高さを確認しながらジャンプをする。弾かれない様に、自分でも柄じや

ないと思うほどに力を籠めた両腕にスパイクの衝撃が伝わる。今までブロックを碎き打ち破ってきたスパイクはドシャツト！

相手チームのコートに叩き落された。

僕らのブロックを打ち破り続けたスパイクが完全にシャツトアウトされた事実に僕たちチームは一瞬静まり返り、数瞬後まるで試合に勝利したかのような盛り上がりを見せた。

「月島ナイスー！！」「ツツキイイー！！」

山口なんかは泣きそうな表情を見せて いる。興奮したチームメイトにたかられないがらも相手のコートへと目を配ると、驚愕の表情を見せた後、悔しそうに顔を歪める相手チームのエースの姿に、少しだけ留飲が下がる思いがした。

これでこちらのチームに流れがくるかと言えばそんなことはない。

当然だ。どれだけ綺麗にブロックをしたとしても所詮は25点中の1点にしかすぎない。元々の自力が違うし、一度渾身のスパイクを止められた相手のエースは調子を崩すどころかより燃え上がつたようで、試合終盤だというのに勢いは増してきていた。

結局試合は2-0で敗退。僕の中學でのバレーは地区大会第三試合で幕を閉じた。

学校へ戻りミーティングを終え帰路に着く。引退試合ということもあり涙ぐむチーフメイトもいたが、僕の胸中にはあの試合で相手のエースのスパイクを止めたブロッカの感触がずっとちらついていた。

後に高校で完全にバレーに嵌った瞬間と比べればあまりにも微かな。けれどもこの時、確かに熱が燐つっていた。

そんな、僕が少しだけバレーに嵌った瞬間の話。

――――――